

男の子に関心 キャンプの場で

子どもへの暴力

第9部 加害を考える ④

性被害をなすには加害をなすのが一番の近道です。加害者の心理や背景を知ることが対策への第一歩と考え、加害の状況などを詳しく書いています。気分が悪くなりそうな方は無理に読み進めないでください。

数年にわたって10人以上の男の子にわいせつな行為をしたとして起訴された30代の男性は、拘留所で面会した記者にこう言った。「回数を重ねてもおぼれなかったので罪の意識が薄れていった」

10代後半から男の子に性的関心を抱き、20歳のころに小学生向けキャンプにボランティアスタッフとして参加した。夜、寝ている男の子の陰部を服の上から触った。へもつとでできる」と歯止めがきかなくなつた。「動画を見よう」などと男の子をトイシに誘い出し、口腔性交をしたり、させたりした。毎年キャンプに参加し、行為を繰り返した。恋愛感情は女性に抱き、彼女もいたが、性行為の時は頭の中で相手を

男の子に変換したこともあった。勤務先の児童養護施設でも男の子に口腔性交をした。20代後半のとき、キャンプで被害を受けた男の子が親に訴えて性加害が発覚し、強制性交等罪などで逮捕、起訴された。

精神医学では「小児性愛」は精神疾患・障害としてとらえられており、13歳以下に性的関心を持つことなどが基準とされる。「小児性虐待」「小児性加害」などと表現すべきだという声もある。性障害専門医療センター

愛障害」と指摘された。専門家は背景に母親からの虐待▽学校でのいじめ▽自身の性被害が背景にある、と分析した。

男性によると、母親はアルコール依存症で頻繁に物を投げて暴れた。小中学校は不登校になり、中学生のとき、ネットで知り合った年上の男性にホテルで口腔性交された。「男の子と接している時は安心感があった」「母親の愛情に飢えていて、それを満たすために男の子への性加害を繰り返した」と説明した。

速捕後、男の子が泣きながら被害を親に訴えた

ことや将来への影響を心配する保護者の気持ちを

約30回面会を重ねた記者に「取り返しがつかないことをしたと後悔している」と話した。一方「はっきりに拒否されていれば性的なことはいらない。男の子の多くは無反応に見えた」と自身を正当化するようなことも口にした。

長期刑が確定し、今後、刑務所内で治療プログラムなどを受けたと考えている。「自分の場合、子どもと親しくなるような環境に飛び込まなければ、再犯は防げると思う」(村上友重)

孤独やストレス要因は様々

れるものだ。原因についての研究は十分ではないが、過去に虐待や性被害を受けた経験や脳の損傷や腫瘍などが関連している可能性がある」と報告されている。

加害に至る背景には、孤独やストレス、子どもと日常的に接する環境にあるなど、様々な要因の重なりがあるという。さらに「(被害者が)喜んでいた」「合意があった」と一方的に思い込むことで、歯止めがかからなくなっていく。

SOMECでは、治療を受ける人同士がグループディスカッションをする。被害者は合意していなかったかもしれない、という視点を持つことで、極端な考えから抜け出すことが狙いだ。

福井医師は、小児性愛の治療に対応する医療機関が少ないと懸念する。「小児性愛は誰がなってもおかしくなく、自身や家族の問題で悩んでいる人は多い。治療対象ととらえ、社会全体の問題として取り組むべきだ」(狩野浩平)